2.　ハイミチヤナギはミチヤナギに比べ一層せんさいであり，茎葉と苞葉の大きさは略等しく，花被片は花被脚部と略同長なる点を特徴とする。

オクミチヤナギは前者より一層巾広い果をもつ点で区別される。なお従来，北海道から報告されている *P. Bellardi* All. は，オクミチヤナギである。

3.　スナジミチヤナギ　本種は椀形又は楕円形の花被脚部と扁平，光沢を有する痩果とによって容易に区別される種類で，従来樺太から知られていたハイミチヤナギはほとんど本種に相当する。

4.　アキノミチヤナギ　本州海岸生の *P. polyneuron* Franch. et Savat. は，北海道東部海岸性のものとは異なり，花被片側脉の隆起は著しく，花脚部は広楔形〜円形を呈し，果は光沢がない。そして通例植物体は乾燥すると美麗な紫黒色を呈する。北海道では南西部に見出されるが本種の分布についてはなお研究を要する。

5.　ナガバハマミチヤナギ　前種に比し，花被側脉の隆起は少なく，花脚部は楔形，果は光沢を有する。植物体は黒変することが少ない。アキノミチヤナギ，ナガバハマミチヤナギ共晩秋に生ずる異常果は他の種類に比して著しく花被より突出し，通常倍以上に達する。*P. oxysyermum* Mey. et Bge. や *P. propinquum* Ledeb. の名で呼ばれていたものは，このような異常果を有するものに対してであって，正常果は両種共花被片より抽出しない。

ウシオミチヤナギは前者より茎高，果共小形である。オホーツク海岸沿いの塩湿地，海岸砂丘地に生ずる。

○ツバキ属の葉序（木村陽二郎） Yojiro KIMURA: Phyllotaxis of *Camellia*

ツバキ属 *Camellia* は葉序が 1/2 であることは冬芽をみるとよくわかる(本誌 31 巻, 105 頁)。しかしまた同じ個体で 2/5 の葉序も見られることがある。本誌，本号の表紙に記したサザンカの葉序の模式図は，2/5 から側芽のでたところで 1/2 となり，それがまた 2/5 にもどるところを示している。Eichler (1875) の花式図 (図 1) は 1/2 の配列の小苞 (1–6) が次第にずれて 2/5 の蕚片 (7–12) となり，さらに花弁にうつるところが示されていて，表紙の模式図とくらべると，Arber 女史の shoot 説など思い出して興味をおぼえる。Eichler の花式図は栽培したツバキによったものと思われる。蕚片，花弁の数が基本的の 5 数より多く，また子房も一般野生のものでは少い 5 数性を示している。

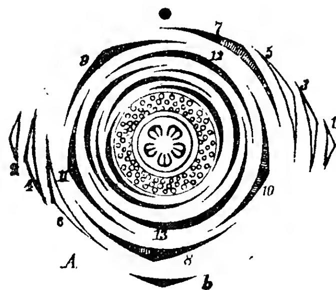


図 1. ツバキ *Camellia japonica* の花式図 (Eichler による).

(東京大学教養学部)